

宮嶋 弘先生を偲ぶ

柿 谷 雄 三

先に後藤丹治先生を失つた悲しみがまださめやらぬ中に、宮嶋弘先生の訃報に提するこゝとなつて、沈痛措く能わざるものを覚える次第である。

先生のお人柄を一口にして申しあげるならば、孤高の天才というふうに申してもよいのではないだろうか。

わたくしが先生にはじめてお目にかつたのは平安文学を中心とする夏季講座が行なわれた時のことであつた。おそらく昭和二十四年の七月のことであつたかと思う。平安時代文法概説と題して、古今集を中心に平安時代の諸法に関する諸問題についてお話になつてゐた。白の背広に扇子を片手に使ひながら、なかなか力のこもつたお話をなさつたように思う。その中で、ハ行子音の変遷について先生独自の見解を語られたことは今もありありと記憶している。

学部に入つてから、国語学概論、国文法、

言語学など主として国語学関係の御講義を承つたのであるが、その都度、先生独自の見解、創見を数多くお持ちであることを知つて、畏敬の念を強く持つたものである。正直にいつて先生の御講義はむずかしいものが多かつたが、中でも大学院でなさつた韻鏡の研究と題する古代国語の音韻論は、たしかにわれわれにはむずかしいものであつた。聴講してゐた者は数名で個人指導に近いお教えを受けることができた。試験の間際にある時間に、わたくしどもがいろいろと幼稚な質問をした時、先生はこんなことぐらいが理解できないのかというふうに微笑しながら、何度も何度も説明してくださつたことを思い出す。それは学部時代には味わえなかつた楽しい一時でもあつた。

このようにして、どちらかといえば近寄りがたく思つてゐた先生の別の面を見出すことができたのは、やはり大学院での御講義を拝聴させていただけたお蔭であると思つてゐる。その頃からわたくしは、卒業論文が語学的な面を取入れたものであつた関係上、祇園のお宅へ御指導を得るために参上したこともあつた。個人的にお話申していると、学問に

あれほど敵しい先生ではあるが、何かしら孤独な寂しい一面のおありの方だということもわかつた。それは先生の御家庭の御不幸にも基因すると思う。先に先生が田村和子さんと結婚なさつた時、心からそれをお慶びし、わたくしどもも先生に今まで以上に親しみを覚えたのであつたが、不幸にして和子夫人は早く亡くなつてしまわれた。先生はもとの孤独の人にもどられたようであつた。それから間もなく先生は病を得られ、桂の方に転宅なさつた。その後はわたくしもご無沙汰ばかりしてしまつた。

先生は学者として、実に天才的、獨創的な才能のお持ちの方であられた。しかし家庭的なご不幸が、先生のご研究をいろいろとはばみ、ひいてお体を虫ばんだことも否めまい。それが、今回の御不幸と何らかのつながりを持つてゐるような気がしてならない。惜しみもあまりあることである。それにつけても家庭の人の内助の功ということが、どれぐらゐ大切なものであるかがわかるような気がする。

ともあれ、靈的なことを信じていらつしやつた先生は、今、冥界にいらつしやつて、和

子夫人と相携えてわたくしどもの愚かしい繰言をほほえみながら聞いていらつしやることであろう。

先生のご冥福を切にお祈り申しあげる次第である。三八・一一・一五（昭和三年七月大学院修了、相愛女子短大講師）

宮嶋 弘先生をしのぶ

堺 光 一

宮嶋弘先生を、私が見受けたのは、余程古い前であるが、意識したのは昭和十四五年頃ではないだろうか。

よく東山松原の銭湯で先生にあつた。夕方のきまつた時間に、きまつた風呂道具を片手にもつて、頭髮を長くして、多分そうだと思つて、結城紬の着物を黒のへこ帯でまいた小柄の先生が風呂屋にきた。

そして道であら先生は一向世間のことには無関心なような恰好で平下駄でいそがしくゆかれたものだ。

私は先生のお仕事は何であるかも知らないので先生に一寸奇妙な感じをもつていたが、しかしそれでも、目が合うと、軽い挨拶をし

て下さつた。

ところが昭和十九年頃急に先生のお姿が拝見出来なくなつた。当時世の中は決戦時代であり、戦の最中であつた。

それから終戦をむかへ、外国軍隊が進駐してきて、世の中は混乱状態をむかへた。私も軍隊から復員して、欠乏の生活にはいつた。

毎日何の方針も立たないように街へさまよい出ていた。

そして偶然先生に、京都駅丸物の前の靴みがき屋でおあひした。

「やあ」といわれて、

「世の中がかわりました。何事も外国から指導してもらはねばなりません」とおつしやつた先生の言葉が、今でもはつきり私の耳に残つている。先生は多分靴の裏金を打たれていたのだ。

それから三度目に逢つたのは立命館大学であり、さらに私が大学院にはいるにおよんで先生は国語学の教授として毎時間、ほとんど個人指導のような形で「言語構造論」を私に大学院の講義をして下さつた。

その間、いろいろ授業中に、自己の感懐を

よくもらされた。自分は中京錦の室町の医者の子で、理科をやつたのであるが、製図を書くのがいやさに文科に這入つてしまつたこと、学問はお面白くやらないけんとか、易のことか、その他身上的ことなど話されて、私もいつしか先生の内面を知るようになり、先生に親近感をいだいた。

その後、病を得られた先生から、私の著書が出版されたことについて祝のはがきを頂き、さつそく著書をもつて桂の先生宅へ向うた。その日は雪のふる寒い日で、その上先生宅が中々見つからず難儀して宅へつくと先生は大変やせた顔を床からのぞかせて、多顔でむかえて下さり、持参した著書とリンゴを心よく受取つて下された。今はその出遇いが最後となつた。昭和三十五年一月四日のことであると思ふ。

もし、先生が病に犯されることなくば、ゆきとどいた、しかも、細かい先生の研究は業績として大を成すものがあつたことである。大変おしい気持がしてやまない。

（昭和三〇年七月大学院修了、洛南高校教諭）